The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜資料紹介＞織田作之助全集未収録作品紹介（四）：随筆「女と婦人」と談話
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2020, 18, p. 54-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介（四）
随筆「女と婦人」と談話

斎藤 理生

既刊三号に引き続き、織田作之助の全集に収録されておらず、これまで先学の研究においても指摘されていない資料を紹介する。敗戦直後の新聞に発表された随筆と談話である。

一 「女と婦人」

最初に紹介するのは、一九四六（昭和二一）年四月一〇日付「東京タイムズ」第六三号の第一面に掲載された「女と婦人」という随筆である。

「東京タイムズ」は、戦後おびただしく創刊された新しい新聞、いわゆる新興紙の一つである。一九四六年二月六日、岡村二一が式場隆三郎の協力を得て発刊した。「岡村を中心とした文人仲間と旧同盟人の協力によって作られた」という経緯、「小説や読み物の重視」と「通信社ダネの重用」という紙面の傾向、「創刊号は印刷の都合により、六万八千部だったが、その後連日増加して、三月十四日以後は毎日十二万五千部を発行した」という発行部数など、「東京タイムズ」の実態については、春原昭彦の研究にくわしい(1)。

「東京タイムズ」において、文学者の随筆が第一面に掲載されることは珍しくなかった。同じ一九四六年四月には、二日に金子洋文「明治の唄」、九日に石川達三「文化人輸入計画」、一二日に井上友一郎「事実の強さ」、二三日に諏訪三郎「天馬」といった随筆が掲載されている。

大阪府立中之島図書館の織田文庫には、「東京タイムズ」に関わる書簡が複数所蔵されている(2)。一九四六年三月二日付の「東京タイムズ編輯部」からの書簡は原稿の依頼で、「随筆　四〇〇字詰　二枚位のもの」と「短篇　同　五枚位のもの」と、「どちらも一、二篇頂けると有難く存じます」と書かれている。また、一九四六年四月七日付の、東京タイ

ムズ社の原田常治からの書簡には、「随筆二篇お送り頂きまして有難うございました」とあり、作之助が随筆を二篇執筆し、送ったことがわかる。ただし、これまでの調査ではこの「女と婦人」しか見つかっていない。

以下、全文を掲げる。

女と婦人

織田作之助

最近こんな話をきいた。

大阪の今里新地――つまり色町だ。そこへ妙齢の美女が来て『前借は一万五千円、衣装費の五千円だけ現金で、残りの一万円は封鎖小切手で結構です』

身売りに来たのだ。もっとも人身売買制度は廃止されたから接待婦といふ名目だ。

いい顔だから、抱主は早速応じようとしたが、何に要る金かときくと

『愛人が立候補をするから、その選挙費用に貢ぐのだ』

と、言ふ。なるほど選挙費用なら、封鎖小切手でもすぐ引き出せるわけだ。

抱主は驚いて、取引をやめてしまつた。いい女だが、立候補するやうな紐がついてをれば、うるさいと思つたのであらう。

私はこの候補者の名前を知りたいと思ふ。

私の知つてるある婦人は、もう二十年前から、亭主に風呂を沸かさして亭主よりも先に風呂にはいつてゐる。結婚した日から、亭主を阿呆、阿呆と馬鹿にしてゐるこの婦人は婦人参政権論者で、今やわが世の春来れりとばかり、口論の泡を飛ばしてゐるが、私はかういふ婦人よりも、一万五千円の前借を頼みに来た女の恋人に、一票を投じたいと思つてゐる。

その婦人を落選させるためにも、そして、その女の志を遂げさせてやりたいためにも。

このやうな私をあるひは反動的といふ人があるかも知れないが、しかし、私は元来、『われわれ婦人は……』といふよりも『私たち女は……』といふ人の方に惚れたがるのである。

東京タイムズ

國民投票の日來る

女と婦人

織田作之助

けふぞ總選擧投票日！

棄權は國民の恥辱です

さア揃つて投票所へ

図1　「東京タイムズ」一九四六年四月一〇日第一面

「女と婦人」が掲載された一九四六年四月一〇日は、戦後、男女普通選挙制度が採用されて初の衆議院議員総選挙が行われた日である。同日の紙面では、作之助の随筆の右側に「国民投票の日来る」、左側に「けふぞ総選挙投票日！」という記事が掲載されていた（図1参照）。そのためこの随筆は、東京の新聞に載った大阪の話とはいえ、時宜にかなった話題として受け取られたにちがいない。

前半では、愛人を立候補させるために性を売ろうとする女性の話が紹介されている。戦後の混乱期を象徴するようなエピソードである。「私はこの候補者の名前を知りたいと思う」という作之助の一文は、民主主義選挙において、愛人にこのような犠牲を払わせる候補者を批判するもののように見える。ところが後半で、作之助は「婦人参政権論者」の「ある婦人」を持ち出し、対比させることで、「一万五千円の前借を頼みに来た女」の肩を持つのである。

愛人のために自分を犠牲にする「女」を評価する。作之助は、そのような自分の姿勢が「反動的」だと批判されることを自覚している。しかし結末の一文に典型的なように、「女」と「婦人」とを対比させるこの文章には、「婦人」という言葉への違和感が明瞭である。一方で、前半の女性については、余儀なく性を売らされるのではなく、自分の意志でこの職業を選択し「貢ぐ」と決めた「志」を評価している。

つまり、ここで作之助は「身売り」自体を肯定しているのではなく、「婦人」という言葉を「今やわが世の春来れりとばかり」に声高に語ることが、かえって見えづらくしてしまう領域における「女」の主体性に目を配ろうとしている。そのような態度は、『夫婦善哉』（「海風」一九四〇・四）の作者にふさわしいものに見える。蝶子は柳吉に無理に働かされているのではない。自分の意志で彼を一人前にしたいと、むしろ柳吉が鼻白むほど努めているからである。

一般に作之助は、政治とは距離を置いた人物として受け取られがちであろう。戦時中に時局的な小説を書かなかったわけではないが、『木の都』（「新潮」一九四四・三）、『高野線』（「新文学」一九四四・一一）のような私小説風の小説や、『猿飛佐助』（「新潮」一九四五・二、「新文学」一九四五・三）のような荒唐無稽な小説も発表していた。また、代表作『世相』（「人間」一九四六・四）には、「オダサク」と呼ばれる人物が、自分たちは「左翼の思想運動」が「失敗したあとで、高等学校へはひつた」、「思想とか体系とかいつたものに不信」を抱いた世代だと語る場面がある。さらに、読売争議が行われていた時期に「読売新聞」に連載小説『土曜夫人』（一九四六・八・三〇～一二・六）を書いていることを青山光二に意見された際にも、自分は「公式主義とは（右翼左翼ともに）たたかって来た男」で、「いかなる時でも団体とははなれて行動し、考へる男」であるから、「ぼくはヨミウリも単一も双方ともに同情するし、双方ともに同情しな

い」と述べている(3)。

ただ、作之助が政治的な活動を好まなかったとはいえ、政治に関わる意見を持たなかったわけではないし、求められなかったわけでもない。一九四六年上半期には、「女と婦人」だけではなく、「大阪日日新聞」に掲載された、やはりこれまで知られていなかった作之助の談話がある。

二　談話「起訴には賛成」

「大阪日日新聞」も敗戦直後の新興紙の一つである。創刊は一九四六年二月一日。作之助はこの新聞に『夜光虫』を連載している（一九四六・五・二四～八・九）。また、「坂田三吉のこと」（一九四六・七・二八）、「自戦記」（一九四六・七・三一）といった随想も発表している。当時大阪日日新聞社には、高津中学以来の友人で、同人雑誌「海風」でも行動を共にしていた吉井栄治が勤務していた。

作之助がコメントを求められたのは、三木喜代子による選挙法違反事件である。三木は、先にも触れた四月一〇日に行われた戦後初の衆議院議員選挙において、大阪第一区から全国最年少（二六歳）で当選。女性参政権が認められて初の選挙だったこともあり、話題となった。ところが、学歴を偽称していたことがわかり、五月一五日に虚偽の資格申請による選挙法違反で起訴された。一九四六年五月一六日付「大阪日日新聞」第一面に掲載された「婦選の黒白いづれ・三木代議士　最終判決へ三箇月　審理は前例なき急調」という記事の「街の反響は」において、次のような作之助の談話が掲載されている（図2参照）。

婦選の黒白いづれ・三木代議士

最終判決へ三箇月

審理は前例なき急調

起訴の理由は「虚偽事項公表罪の疑ひ」

街の反響は

もう辭退しては…

―本社への投書に拾った勧告

図2　「大阪日日新聞」一九四六年五月一六日第一面

起訴には賛成　織田作之助氏（作家）談　三木氏が当選したとき、なにかいやな予感がした、たとへば、彼女は当選したとき、新聞に男たちに胴あげされて笑つてゐる写真が出た、なるほど代議士に当選することはうれしいことだらうが、彼女が日本でいちばん若い女代議士としての今後の責任を感ずるならば、男たちに手足や胴をつかまれてはしやいでゐるやうな喜び方をしないはずだ、何となく女の浅はかさを感じ

た、果して今度の起訴だ、一個の女性としての彼女の過去や虚偽に対しては、僕は石を投げる気持はないけれども、女性を代表した場合の「三木喜代子」といふ女性に対しては、こんどの起訴に賛意を表する

「街の反響は」には、作之助の他に、「学歴より人物」という歌舞伎女優の中村芳子の談話と、投書欄に投稿された四名の意見が掲載されている。

作之助はここで、三木という一人の女性と、女性の代表とを区別して、後者を批判するべきだという姿勢を見せている。一個人と政治家とを区別する立場である。そこには、志賀直哉に一定の評価を与えつつ、志賀直哉に象徴される文学は強く批判した「可能性の文学」（「改造」一九四六・一二）と通底する発想がうかがえよう。

このように、作之助が政治活動にほとんど興味を示さなかったとしても、メディアの側では意見を求めていた。それは、当時の大阪におけるこの作家の位置を示していよう。作之助はこの時期、『六白金星』（「新生」一九四六・三）、『競馬』（「改造」一九四六・四）、『世相』などの話題作を中央の総合誌・文藝誌に立て続けに発表し、『夜光虫』と並行して『それでも私は行く』（一九四六・四・二六～七・二五）を「京都日日新聞」に連載するなど、目覚ましい活躍をしていた。だからこそ、いわゆる文化人、知識人として、専門以外の政治・社会問題に対してもひとかどの意見を述べてくれる人物として期待されていたのではないか。

一九四六年の春の時点においては、作之助はデカダンな「無頼派」というイメージから遠い。ここに紹介した随筆と談話は、作之助の女性観や言語感覚と共に、今では見えにくくなった当時の作家像も浮かびあがらせているのである。

注

（1）春原昭彦「東京タイムズ休刊――ユニークな戦後新興紙の歴史を振り返る」（「新聞研究」一九九二・九）。井川充雄『戦後新興紙とＧＨＱ　新聞用紙をめぐる攻防』（世界思想社、二〇〇八、六六頁）も参照。

（2）織田文庫書簡２８６、３９６、３９７。ただし３９７は、東京タイムズ社が関わっていた雑誌「ロマンス」に掲載された『大阪の女』（一九四六・六）の原稿料の領収書と受領書であり、性質を異にする。

（3）「織田作之助からの手紙」（高橋徹編「月の輪書林古書目録十七　特集・ぼくの青山光二」月の輪書林、二〇一四・一一）

〈付記〉本研究はJSPS科研費 17K02450の助成を受けたものです。

（さいとうまさお／本学准教授）